

# 英語教育ジャーナル

The Journal of English Teaching

## こうしてほしい英語教育

〈座談会〉まじめに教えてほしい

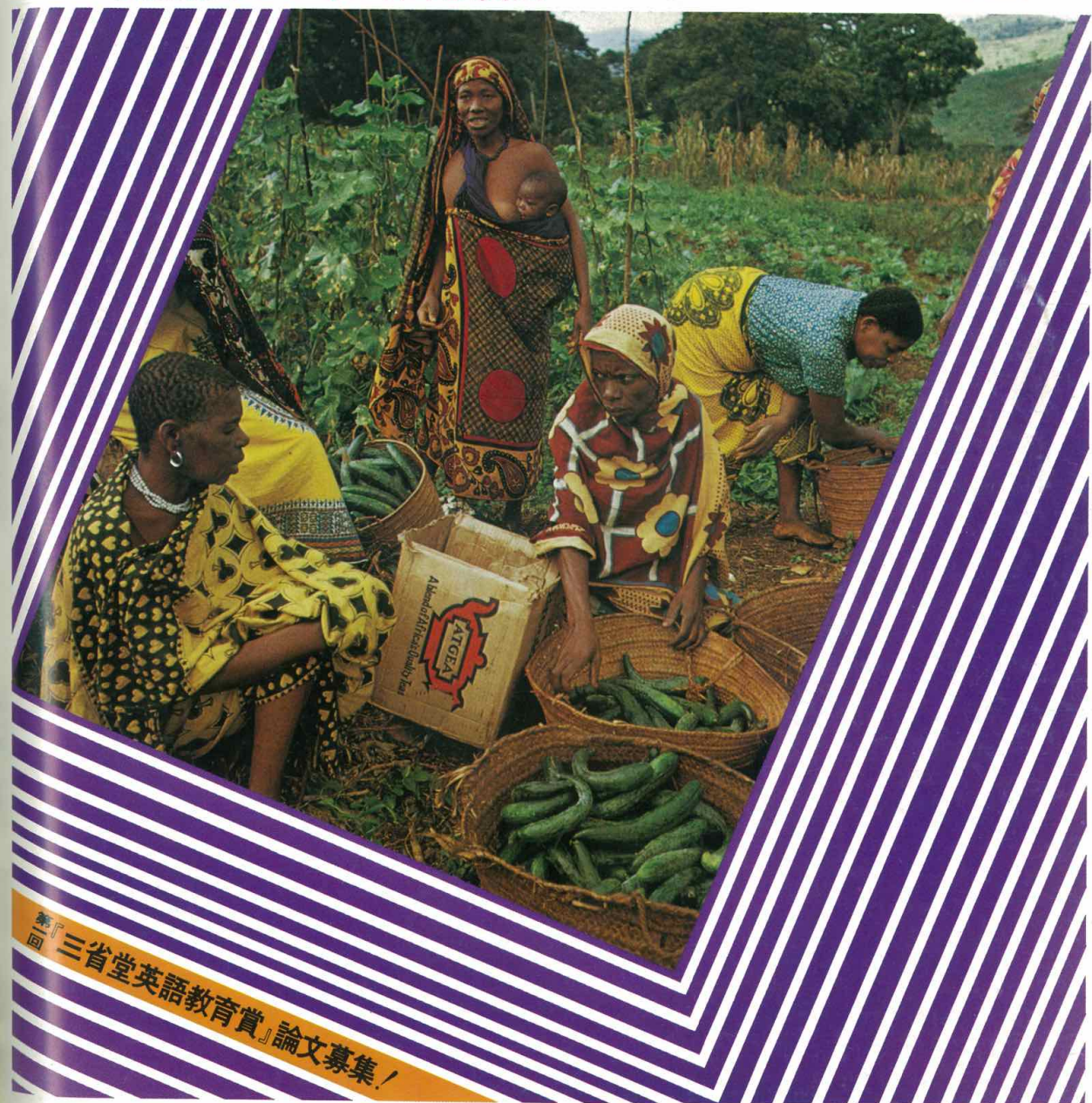
〈連載〉外国語入門「トラック語」

英語教師のための日本語文法

100  
三省堂創業100年

# 9

SEPTEMBER 1980



第1回『三省堂英語教育賞』論文募集!



### 磁気テープのソフト化への可能性。 さらに追い求めます。TDKコア。

TDKコア株式会社は、磁気テープの専門メーカーTDKから、  
教材部門が発展、独立したソフトウェア専門の会社です。

TDK時代に築いた10余年の実績を基に、  
これからの教育産業の中核となるべく、新しい商品の創造と普及をめざしてスタートしました。  
これまでも、TDK教科書カセットをはじめ中・高校生用の学習テープをお届けしてきましたが、  
さらに、より良いソフトを、すぐれた商品を開発し、お届けしようと努めています。



#### TDK教科書カセットの種類

- 〈中学英語〉
  - ニュープリンス●(1・2・3各学年)スタンダード版・デラックス版・ヒアリング・テープ・TEACHER'S TAPE ●ニューホライズン●(1・2・3各学年)スタンダード版・LLテープ版・文法版・ヒアリング・テープ・TEACHER'S TAPE ●ニュークラウン●(1・2・3各学年)デラックス版
- 〈高校英語〉
  - NEW HORIZON Senior English Course 1・2・3
  - NEW HORIZON English Readers 1・2・3
  - A NEW GUIDE to English Composition 1・2・3

TDKコア株式会社

東京都中央区日本橋1-13-1 103 ☎(03)278-5052





非常に印象的でした。

中学一年の最初の授業でした。英語は、長いマラソンコースのスタートラインにいま立ったのだ。いまから走り出すのだから、これからの努力次第でどうにでもなるという意味のことを先生が言われました。私は、他の教科がだめでしたから、英語だけはなんとかがんばってみようと思ったわけです。私と英語の出会いの第一印象がよかった。授業はすごく厳しく、反発を感じたこともありましたが、でも、夏休みに先生からストーリーをお借りして、大学ノート3冊にびっしり訳していったのを、先生は、赤ペンで全部手を入れてくださった。私は、すごく感動しました。先生は授業中にいっぱい絵を描きましたが、それがとても楽しかった。先生のいろいろな面が、今日の私の存在に、非常に大きな影響を与えたわけです。

—— 高校へ入ってからの授業というのは？

**和気** 日本女子大の付属高校へ入りましたが、高校の英語の授業で印象深かったということはありません。中学の時の印象に比べ、興味が半減していくなかで、中学校の時のその先生から受けた影響を持続させたいという気持ちを支えに、個人的

の高い理想に生徒がついていけない面もあったけれど、*Escape From Freedom* など読まれたわけですが、難しいから質問するわけですよ。今度までに調べておくといいながら、結局一日延ばしに延ばすばかりで答えてくれない。

—— 中学の時も感じましたか。

**吉田** とにかく、中学校の時の英語は、白痴的だったんで。

—— 白痴的というのは？

**吉田** ほくが、英語全然だめだったんです。三年になるまで英語の勉強なんかしたことがない。Be動詞もわからなかった。それから、高校受験を目前にして、英語を勉強しなくてはいけないということに、はたと気がついたわけ。仕方なしに、受験英語をやったわけですが、そこで英語って案外面白いものだ気がつきはじめたんです。

すごく感動したノートの朱

—— 和気さん。

**和気** 私が英語を教える道に入ったきっかけは、やはり中学一年の時の先生でしたね、実にエネルギーシユで若々しく……。授業は、その教師の全人格だと言いますが、その先生の授業は先生の人格そのもので、すべてに人柄がにじみ出ている

さんにはあるみたいですね。英語の授業を離れてもいいからどうぞ。

**内田** この間、生徒総会を開いたの。それも、苦勞して5年ぶりにやっと開いたわけね。でも、結果的には失望した。学校というのは、授業をするところというよりは、先生に都合がいいようになにもかも決めてしまい、学校とはそういうところだよと教え込まれているみたい。結局は、あんまり自分の意見を出しちゃいけないという感じがする。

—— そのとおりかもしれない。

**内田** 生徒の手で *Speakers' Corner* という新聞をずいぶん苦勞して出したんだけど、チェックが厳しくて、それもあり骨抜きにされてしまった。

—— なるほど。

**吉田** まず日本人の英語の先生に対して一番感じることは、外人の先生に比べて、勉強の量が著しく少ないということですね。先生たちもより密度の濃い授業をするためには、自己をインプットしていかなくてはいけない。いま ICU にいるわけですが、外人の先生は、生徒たちがパッシブであってはならないと強調しています。いま思うと、中学校の授業は、先生が教科書を読んで、説明して、ああそうかという感じ。こういうの実につまらないでしょう（笑）。多分、いまでもそうだと思うけど、全然アクティブではない……。

—— 生徒の方がね。

**吉田** 生徒がなろうとしないということもあるけれど、とてもなれる雰囲気ではないし、受け身の要素は変えられないと痛感します。

—— 教師の学習量が足りないというのは、たとえばどんなことで感じましたか。

**吉田** たとえば、高校の時、先生

ろなシチュエーションに役立つフレーズを暗唱する時間なんです。会話というか、二人で話すということにはまったくないわけです。だから週一回、日曜日に外人の先生に教わっています。

—— 個人的にね。

**淡路** ええ。その時には、とにかく話さなければ。3秒間以内に何かしゃべらないと先生はもうそっぽ向いて、相手にしてくれませんから。

—— 次は、内田さんにうかがいましょう。

**内田** 聞いて話す授業じゃなく、読んで書く授業です。

—— 読むというのは、声を出して読むの？

**内田** そのはずですが、それもはっきりしないわけ。やっぱり聞いて話すことを授業のなかで大切にしてほしいのね。

—— 受験が近いけど、どう考えてるの？

**内田** 一応、受験問題集をやっていますが、つまらない。書く量が多いから、字はうまくなるだろうけどね（笑）。仕方なしにやっている。

—— 内田さんにとって、面白い授業ってどんな授業ですか。

**内田** ただ、教えられる授業じゃなくて、その授業の範囲で、自分の考えていることをもう少し言える授業があってもいいと思う。

—— たとえば、そういう場面が与えられる授業はありますか。

**内田** 少しあるのは、国語の授業ぐらい。ここどう感じたかぐらい聞くことがあっても、みんな黙っている。ああ言いたいなと思っているうちに、「ありませんね」という具合になってしまう。英語の授業はそれすらない。

—— 何か言いたいことが、内田

勉強量が足りない日本人の先生

—— いま受けている英語の授業について、まず淡路さんから。

**淡路** ほくは中二の時、音声指導にずいぶん力を入れた授業を受けました。もちろんそれだけではないけれど、特にその音声指導の点にひきつけられて英語に興味を持つようになったんです。ところが現在受けている高校の授業は、いわゆる発音気にせずなんです。たとえば r と l, b と v など中学の時にはそれらのつづりを間違えることなどなかった。自分の頭のなかで単語の音が響いていましたから。ところが恥ずかしい話ですが、高校になってから間違えることがある。教室でしゃべる量といたら先生が一番多い。

—— 英作文は教科書を使っているの？

**淡路** 一応使ってます。shopping だったら、それに関する例文が並んでいて暗記して書くだけ。

—— グラマーはあなたにとってどういう時間？

**淡路** 迷ったときに役立つぐらいで、文法からむきになってやろうとは思いません。

—— リーダーはどうですか。

**淡路** 英語のなかの翻訳という部門しかやりません。英語をいかに日本語におきかえるかに重点が置かれ、英語を英語として理解しようとは絶対にしない。英語として考えさせるのではなく、すぐ辞書を引いて日本語におきかえる。退屈です。

—— 英会話？

**淡路** それもただ暗記して紙に書くだけ。

—— しゃべらないの？

**淡路** しゃべらないです。それが何ともおかしいことでして、いろいろ

こうしてほしい英語教育

まじめに教えてほしい

●出席者  
淡路佳昌

[東京都立白鷗高等学校2年]

内田直美

[東京都台東区立駒形中学校3年]

森岡美光

[東京銀行本店営業部]

吉田 豊

[国際基督教大学1年]

和気恵理子

[日本女子大学英文研究室助手]

※五十音順、敬称略

●司会

若林俊輔

[本誌編集主幹]



に勉強しました。さっき淡路さんが、音声指導についておっしゃいましたが、私もあのころrやlの発音など、すごくクリアに教えてもらった記憶はあるんですが、それ以後はまったくゼロ。アメリカへ行った時もそれを指摘されましたが、教える立場にある現在でも自責の念にかられています。

—— 森岡さん。

森岡 中学時代でまず思い出すのは、口語主体の100課まである教科書です。

—— Learn English (学校図書) ですね。

森岡 はい。それを頭から暗記したんです。そのことが、一番印象的でした。そのころの勉強というのは、エンピツを握って勉強したという記憶より、家に帰ってからも、学校の廊下でも、教科書を片手に歩きながらも何でも、常に口を動かして勉強していました。それは、学校の進度に関係なく、みんながどんどん覚えていっていいわけです。授業でその課をやる時には、すでにその文章が口をついて出るくらい。文法事項など先生の説明を聞くと、パズルが解けるように授業がずっと入ってくるんですね。授業で新しいことをやるのが、全然苦にならなかった。授業でやることと、自主的に勉強する

意欲のバランスが、非常によくとれていたように思います。それが私には非常にフィットしていました。こうなるとその先生をべたほめするだけになるので(笑い)、そうでない友人に会って聞いてきました。一人は暗記が進んでいるうちはよかったけれど、暗記がつかずいた時点から、急に英語がいやになったと言っていましたし、もう一人は、先生がかなり意欲的だったので、かえって逃げ腰になった面があったようです。かなり意欲的な生徒に照準が当てられた授業でした。私にとって面白いと言えた英語の授業も、本気で勉強したのは中学時代だけ。高校以降は、英語としての興味ではなく、受験教科としての関心でしかなかったように思います。

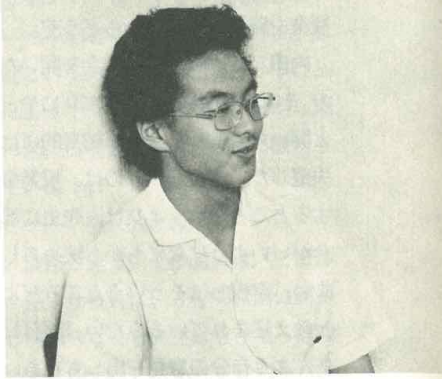
#### 文法がわかってても 雑談ができない

—— 大学の授業はどうでしたか。教える方にとっても、単位のために集まる学生が多いように思えるんですが。

森岡 出席したのは、学期の最初と終わりぐらいで、あとは自分でやっていたから。ほとんどがそういう授業で、面白いとは言えませんでした。

—— 高校にしろ、大学にしろ、ただ行っていればいいところになっては、非常に困るわけですね。

森岡 学校へは、授業だけを期待して行ったわけではありません。私は国立付属高校でしたから、試験的に教科書を使わない授業もありました。社会科など、思想的なことまで織りまぜて、授業の前から期待があったり。英語に限って言えば、さっきのとおり、授業の1時間より、自分でやる1時間の方が力がつく。



とすれば、学校の授業は別の意味で工夫されるべきではないかと思えます。私は、専門がフランス語だったので、パリに1か月くらい行きました。そこで外国人向けのフランス語の授業を受けたのですが、一番驚いたことは、日本の大学でフランス語をやった人なら誰でも熟知しているような基本的な文法を知らなくても、フランス語で何不自由なく雑談してるんです。日本の受験体制では無理かもしれませんが、どんなに文法ができ、問題が解けても雑談すらできない。

—— 淡路さんは、1年間、アメリカへ留学するそうですが、雑談しに行くのですか。

淡路 そうですね(笑い)。ぼくは中学の時は、ある程度日本語とまぜた英語をやってたんですが、高校へ入ってからは、英語のノートには一切日本語は書かないことに自分で決めたんです。辞書は、英英辞書にしました。中学の時、基礎をやっておりますから、英語をそのまま、簡単な英語にしていくのです。そうやって、日本語をなるべく使わない努力をしてきたつもりですが、この姿勢を貫くことは、ぼくの高校の英語の授業では通用しません。この間のリーダーの授業の時、訳を当てられて、うまい日本語が思い浮かばな

かったので、やさしい英語に直して言ったら、お前はだめだって言われました。その時、英語の授業中に国語の勉強しているみたいで、いやでした。ずいぶん苦しみを味わいましたので、もうこれ以上苦しみたくなかったんです。

—— あなたにとって英語とはなんですか。

淡路 言語学習というのは、本来異民族異国民間の意思疎通の手段でしょう。その手段が、今では目的化しちゃって。そのうえ、日本の受験英語というのは、一つのゲームみたくに見える。文法というルールがあって、単語・センテンスとかいう、マージャンで言えばパイに当たるのがあって、それをいかに組み立てて穴埋めするか、それで点数を取っていくというゲームです。

—— どこでポンするとかねえ(笑い)。

淡路 その翻訳というゲームがクローズアップされているだけ。

—— すると、あなたは一体どうなるうとしてるわけ？

淡路 いま模索中なんです。他人に、君の将来にとってよくないと言われても、自分で決心してやっている途上ですから、納得いくまでやってみるしかないですね。英語を手段として学ぶからには、手段として使ってみよう。

#### 先生との出会いがあった

—— 英語との出会いは？

淡路 やっぱり、先生との出会いですね。ぼくは小学校の時は、すごい問題児で劣等生でしたから。学校の授業は強制されて、やっと机についているという感じでした。国語などは、授業より、自分で本を読ん



で、それについて友達をつかまえて討論する方がよっぽど面白かった。

—— 社会科なんかどうですか。

淡路 歴史のなかの現代は好き。中三のころは『現代用語の基礎知識』なんか読んで遊んでいたから。

—— 高校受験の勉強はしたの？

淡路 覚悟はしましたね。受験体制のなかに、組み込まれているんだなと自覚した時からは。点取りというのはいまもって好きになれないんだけど。

—— なるほど。吉田さんはなぜICUに行かれたんですか。いま専攻は？

吉田 日本語教授法をやりたいです。英語をやっている、日本語が面白くなってきた。日本語を逆に外国人に教えてみたいと考え、手取り早いのはICUだったから。高校の時は、受験一本で、日本語を楽しむ余地などまったくなかった。その時、先生が、日本語は全然理論的ではないと言われたのですが、ぼくはとんでもない間違いだと思っています。

—— 自分の書いた文を使って作成された問題を、その筆者がまったくできなかったという話をよく聞きますが(笑い)。内田さん、いまどんな国語の授業を受けているの？

内田 国語の先生自身が、もう一年生の時から、これからやる授業は日本語の勉強じゃなくて、受験の勉強だって言っているくらいだから。でも、たまにある文章を読んでいて、その時、頭のなかでどんな絵を思い描くかということを知ることがあるんです。それがとても好き。でも、みんなも私も、それを言葉で表現できないし、絵にも描けない。

—— 英語の文章では、頭のなかで絵を描くことあるの。



内田 いまは、英語の場合は記号を見ているような感じ。これをこう入れるとこうなる。まるで数学と同じ感じ。授業中は目を開いて寝てみたい(笑い)。

—— 数学では？

内田 絵を感じる時があります。ぱっと割り切れたときはどれもきれいで、それを記号だけで表現するのって味気ない。

—— 図形、あれははじめから絵になっているね。

内田 ええ、そのうえまた描かなくてはならない。

森岡 私にとって一番面白かったのは、中学の時に行っていた塾の授業なんです。いま絵の話が出ましたが、小学生には詩を読ませて、それを絵にさせ、みんなで見たりする。中学の授業では、あるテーマのもとにいろいろな作家を読み、まず3~4人のグループで討論させるんですが、次にその結果を20人ぐらいですが、みんなで話し合いをしてそのクラスなりの結論を出していくわけなんです。また、みんなが交代で発表し、その後みんなで意見をぶつけ合う。半分けんかみたいになったこともあります。それから、ある一つのテーマで200字とか400字で自分の意見をまとめることも面白かった。中一の担任が国語の先生で、ノートに



内田直美



これに類することをやらせ、先生が直してくださったのが印象に残っています。

——言葉の仕組みについて、「馬鹿なまね」と「馬鹿のまね」の違いのようなことは国語の授業ではやりません。

森岡 言葉の仕組みを体系的にやったことはなかったと思います。

—— ぼく自身の考えを言う、英語は arrive at と in の違いなどばかりに気を配って、細か過ぎて、全体を見通していない。国語は細かい仕組みより表現とか、全体的なことに重点が置かれ、どちらもお互いにバランスがとれていない。

和氣 学生自身、受験を経てきているので、英語と日本語がきちんと対にならないと安心できない。教師の方が大体それでいいと言っても、学生から逆に厳しさを要求されるところがあります。学生たちは、英語にしろ、国語にしろ、いい点を取るための学習にならされ過ぎてしまっています。やはり、言葉としての学習と言葉を用いてさらにもう一步突っ込んだ学習と、両方のバランスが大切だと思うのです。机の上ばかりで言葉の勉強をしていますから。

—— ひとり言みたいなの、しかもかなり精神分裂的なね。

和氣 ええ、言葉であって言葉で

ない。

—— ある人が書いていたんだけど、教室では、I want some water. などと言っても水が出てこないのはおかしいってね。

淡路 それが、ぼくの中学校の時の先生の授業では出てくるんです。want の時、本当にジュースとかキャンディーとかが。食べたり飲んだりした後で、できなかつたりしたら怒られる(笑い)。

—— そのお金はどこから出たのかな?

淡路 ポケットマネーでしょ。

内田 それとは違うんだけど。ある教科書の公書の会話の劇のところ、病人になった人が、“Shall I help you?”と言った付添いより先に歩いたりするとすごく注意された。病人の役になった人が、本気に倒れてけがをした人も出たりして、すごくうけたんだけど。英語の成績に関係なく、みんなでいろいろな役をした。

—— けがをした方は、たまったもんじゃないね。ところで成績の話が出たけど、淡路さんや内田さんにとって成績って何でしょう。

### 成績の受け止め方3つの型

淡路 もう慣れたからどんな成績でも苦にならない。都立高校入試の時は、ぼくの受けた群では、最低の内申で受けましたから。

内田 勉強すること自体きらいじゃなかったから、悪い点数はめったにとらなかつた。悪い成績がつけば、やっぱり勉強が足りなかつたんだと思うぐらいで気にしない。

—— 森岡さんはどうですか。

森岡 中学の時は、運がよかったから、気にしなくてすみました。高校では、三年の夏ぎりぎりまで、運動部でバスケットをやっています。

た。勉強する時間がまったくなかったというわけではないけれど、受験に必要な知識の量に歴然と差が出てくるわけです。勉強時間をかけている人と不足している人に差が出るのはあたりまえとっていましたし、大学では授業に出なければ、悪くても当然と思ってましたから。

—— 吉田さんはどうですか。

吉田 ぼくは、成績を気にしました。中学の時は勉強もしなかつたし、問題にもしなかつたけど、高校は義務教育ではなく、自分で希望して進学したのだから、勉強すべきだと思ってました。それに、強い発言力を持つためには、いい成績をとらなければならなかつた。当然ある程度の成績は保持してきました。

—— そうか。でも、一般的には、どんなふうに成績を受け取っているんですかね。

内田 普通は、結構成績に対し、びくびくしている。1点1点を命を削っている人だっている一方、下の方の子で、全然関係ないっていう顔している子たちもいる。

—— その人たちは、学校で勉強するってことをどう考えているの?

内田 うさ晴らしをしている感じで、仕方がないから行ってやろう、こんな具合……。

—— 淡路さんも、あなたは問題児だったって言うから、その辺よくわかる?

淡路 変わったんです、中二の時に。自分でも明らかにわかるほど変身した。

—— 非行から優等生まで変わった。

淡路 ぼくは、成績の受け止め方に、3つのタイプがあると思うんです。第一のタイプは、自分の学問とか、求めるものに対し、自分の姿勢

が確立していてそれに向かって努力している場合です。学校の成績評価の時間の軸には、関心を持ちません。自分が一生かかって極めていけばいいのだから。第二のタイプは、それが確立されていない人の場合です。学校の成績の評価の時間軸のなかで生きていくしかない。先生に評価してもらって。だから成績が重要な意味を持ってくるわけです。第三は、前の二者とはまったく違い、勉強そのものに関心がない。毎日遊んで、たばこ吸って、夜お酒飲んで、寝て、朝学校に出てくる。成績など見えはしない。

### 発言権を保持するためによい成績をとる

—— 内田さんも、学校でそういうこと感じますか。

内田 いろんなタイプの人がありますが、先生が右向けと言え、右向け子がほとんど。そこところが、変にさめているのね。

—— 右向けって言えば右向いて、それがなくなると左向いちゃうってことあるわけ?

内田 それは、しよっちゅうです。先生の見てないところでは、いろいろある。本人たちは、それなりに考えているかもしれないけど、そんなことをして、果たしていいのかな、なにか時間があったくないような気がする。結局、その人たちに時間をぼつと渡しちゃうと、もう勝手に勝手に好きなように使って浪費してしまうようで惜しい。

—— だとすると、学校の方が強く抑えつけるしかなくなる。

内田 抑えつけるんじゃなくて、やっぱりそれが教育というものじゃないの。よくわかんないけれど、生徒をそういうふうに向けてい



和氣恵理子



くのが先生の仕事だと思う。

—— 和氣さんが、中学生のころはどうでしたか。

和氣 学校群制度ができたばかりで、いわゆる生徒の粒がそろっているというか、自由な雰囲気の良い学校でした。落ちこぼれそうな人もいたかもしれませんが、成績の順位づけにこだわることもなかったからだと思います。

—— 順位って、どういうこと?

淡路 中間、期末テストなどの各教科の得点を合計して、高い得点順に生徒の成績を順位づける。

—— あなたは経験していますか。

淡路 問題児でしたから、気にしなかつたけど。要するに、成績を気にかけることから、気にかけない境地に至るまでの目覚めというものが、席次をつけることによって、押しつぶされ、その芽が摘まれてしまう。そして、学校での人間関係にまで、生徒や教師も含めて、それが出てきてしまう。ぼくの場合は、幸か不幸か問題児だったため、成績にとられない神経ができたんで。でも、さっき吉田さんから発言権を保持するために成績を上げるという話があったんですが……。

内田 それは、絶対にあると思う。先生は、成績で判断するところがあるから。

—— もう内田さんだからしょうがねえと。

内田 うん。だから新聞も出せんだと思う……。

### 生徒が参加できる授業を

—— きょうは、英語教育ということが趣旨のはずでしたが、途中で私の気が変わって、教育全般の話になったわけですが、結局それでよかったと思うんです。

最後に、こんなことも言っておきたかったということがありましたら、何でも言ってください。吉田さんから順番にどうぞ。

吉田 生徒が参加する授業を切望します。教師が、ワンパターンの授業をし、生徒がそのまま鶴呑みにしていくのではなく、先生と生徒と両方が共同で、あることを創造していく授業を、中学校の時からやってほしいですね。生徒が自ら参加する意欲を盛りたてなくては……。

和氣 私も、参加する授業ということで一言。私の持っている2つの授業の比較から言いますと、朝日カルチャーセンターの方は、自分から学びたくて集まった主婦などが多いのですが、大変な学習意欲なんです。一方、看護専門学校の方は、授業のひとまとまりとして組み込まれているものですから、学習意欲は前者とはまるきり違います。教師は、私も含めて、学生たちの参加したいという芽をもっと引き出すような授業をしなくてはいけないと思っています。それは席次はだめだけど、英語はよい、ヒアリングはだめでも発音はいいというように。これは、私自身の歩んできた道を振り返っても言えることです。それにはまずしゃべることから参加する。「沈黙は金なり」を美德としてはいけないうるのでは



す。きょう、私が一番若い内田さんから多くを学んだように、教師も生徒から学ぶことがあると思います。

— Teaching is learning.ということがどうも忘れられてるっていいのかね。

淡路 今の教育は、「君、これについてどう考える？」というふうに考える材料が与えられてはじめて、それをどう投げるのかという選択や処理はうまくできるんですね。しかし、自分でそれをつかみ出してきて、自分の力で料理することができない。これは、英語に限らず全般的に言えることです。ぼくの経験ですが、高校受験の時、問題文のかっこの穴埋めばかりやっていたんですね。ところがあつとき、絵があつて、それについて好きなことを何でも作文しなさいというのが出たことがありまして、これにはどぎもを抜かれました。面白かったですが。

次に、ぼくたちが日本語を覚えた時と同じように、英語も基礎的なことは動作をとまなせて覚えていく。そしてその動作と字面を一致させる時期が、中学時代だと思うんです。次にその基礎を土台にして、自分なりに考えていくのが高校からの勉強なんですよ。いまの高校は、その辺の区別ができていない。

話はそれですが、うちの学校に笑い話があるんです。シンガポールから文部大臣が来たんですね。彼は、全然日本語がしゃべれない。そこである英語の先生が、英語でいろいろ話したんですが、その後、文部大臣が発した言葉というのは、「私は日本語がわかりません」だったとか。

— まいったな(笑い)。

淡路 何で英語をしゃべれない人から教わって、英語がしゃべれるようになるんですかね。日本の公立の

中学でも高校でも、日本語が話せない外人の先生が必要だと思えます。

### 英語はなぜ科目か、なぜ成績をつけるのか

森岡 基本的に疑問に思うことが一つあるんです。なぜ教育をするのに成績をつけるのか、その目的がわからないんです。特に大学は、もう自分のやりたいことをやりたいようにやる所でしょう。

いま私は、高田馬場にある寺子屋というところで、いくつか講座に出ています。柳田国男研究とかフッサールなど。集まってくる人は社会人ですが、私にとっては、はじめての成績のつかない勉強の場です。基本的には、勉強とは自分でやるものであって、大学では自分でやりたいことを自分で選択する。高校までの教育は、そういうことをできるように、目を開かせるために必要な基本的知識を養うべきだと思います。

いま私は、銀行に勤めています。いわば一流大学で高等教育を受けた人たちが集まっていますが、お客さんに渡すメモ一つ、まともな日本語が書けない。また、外人がカウンターに来るとしり込みしてしまうなど、高校・大学とたまたまじめに勉強してきただけでは、こういうことすらできないというところに疑問を持ちます。それに対する対策は持っていませんが、英語に関して言えば、英語というのは、英語そのものという言葉であつて科目ではない。それがいま科目としての英語というものがクローズアップされているようで、そこから疑問を持ちます。

— これは大問題だ。英語が科目として存在しているっていうこと自体に対する疑問というのは、これはちょっと大変な問題ですね。最後

に内田さん。

内田 前の4人の方が言ったように、授業に自分が参加して、自分のやりたいことを選ぶとか、自分のしたい勉強をやるようにするには、高校からでは遅すぎる。もっと前の時点から訓練しなかったら、落ちこぼれる人がどんどん出てくるのは確実だと思う。

— 内田さんの考えるもっと早いうちからというのは、いつごろからだといひ?

内田 私の場合、小学校二年でもう完全に。それはその1年間だけで、それが全部組み立てられるように自分で覚えたんだけど。まあ先生もよかつたし、家庭でもそういうやり方だったしね。これは、結局は自分で考えることかもしれないけど、なぜ社会科なら社会科を勉強するのか、国語を勉強するのかということからはじまって、学校の細かい規則や、学校へ行く目的についても、私は今まで一度も先生から聞かされたことがない。それを聞こうとすると生意気だということになるしね(笑い)。

それから、英語や国語に関してですが、言葉を習うということは、点数を取るためではなくて、自分が考えていることをいかにうまく伝えることができるか、それも理屈抜きで、ぱつと言えようになりたいと思つて勉強してるんです。私は言いたいし、ひとり言だつて人に聞いてもらいたい性格だから(笑い)。

あとは、学校自体あまり面白くないところだしね(笑い)。何か、日に日に自分がみみちくなっていくような気がしてしょうがないの。

— そのくらいでやめておこう。最後にとどめを刺されたようだ(笑い)。どうもほんとうにありがとうございました。(文責:編集部)

# 英語教育改革へ向けて

小笠原林樹

## 英語の選択時間増設の可能性

英語教育を改革する場合には、(a)現行の学校教育の教科構造はそのままにしておいて、英語の授業を中心に改革していく方法と、(b)学校教育の教科構造を変えたいうえで英語教育を変えていく方法とがある。本稿では(b)の場合を述べてみたい。

先日ある中学校の英語授業を参観していた時、壁に貼ってあつた中学2年次の時間割が目についたので、メモをとっておいた。一週間32時間で、その内訳は、国語5、社会4、数学4、理科4、英語3、美術2、音楽2、技術/家庭2、道徳1、体育3、学級活動1、クラブ活動1となつている。私は中学生の子どもの親として、この構成には憤懣やるかたなきものがある。国語5、社会4、数学4、理科4のあたりまではよいが、それとくらべて英語3はいかにも少なすぎる。それに美術2、音楽2、技術/家庭2は各1でよい。体育3も2か1でよい。道徳などは生徒の親が家庭で行なうべきものであり、学校では社会科の一部としてするか、学級活動のところでやればよい。クラブ活動など放課後の問題で時間割に組みこむべきものではなからう。美術、音楽など情操的なものも学校でそんなにしてもらわなくてよい。学校外でのたしなみに委ねればよい。学校はもっと知的教科の学習に徹したらよい。とにかくこうすればもっと時間が浮いてくるので、それを生徒や父兄が希望するものにまわしたらよい。

中学校の現行の教科課程は21世紀に生活していく日本人の教育としては、あまりにドメスティックではなからうか。もっと国際生活力をつけられるようなものにするべきであつたと思う。文部省の招集した教育課程審議会のメンバーは、あまり国際的感覚をもった人たちではなかつたという事情もあつたらう。国際社会科とか異文化

言語文化学習という教科を新設してもよかつた。前述のようにしてつくり出した時間は、希望の生徒にこういう国際的教科を学習させたらよいのである。異文化言語文化学習ははっきり言えば、英語の増加時間であり、国際社会科は異文化と日本文化の比較学習のためのものであり、このようにして、バイリンガル、バイカルチャーのための基礎教育を始めたものである。親のほうの私はバイリンガル、バイカルチャーの人間であると思うが、未来に生きる私たちの子どもはそういう親をのりこえて行くはずのものであるから、教科構造もそれに適したものであつて欲しい。

かくて、英語の時間は3時間プラス増加時間2~3時間で、希望する生徒は週5時間から6時間もとれるのである。

なお、いっそのこと英語を集中方式である時期だけ毎日3~4時間するという事も考えられるが、これについてはいまはこれ以上言及しないことにする。

## 本国人教師にもつかせたい

朝鮮語やインドネシア語やタガログ語を学びたいと思つたら、私は日本人教師につきたいとは思わない。そういう言語を母国語として話している本国人で、適切な人について習いたいのである。英語についても私は同じ気持をもつていた。私の調査でも、中高校生も大学生も、本国人教師からも英語を習いたいとみな思っているのである。

## 英語の検定教科書はやめてもよい

私がいつも言っているように、私なら現行のような検定英語教科書は使わない。仮に使うとしたら、3学期の終りのほうで、一週間ぐらいかけて、その学年の総復習のために生徒に読解させたり、エクササイズをさせたり

TO THE EDITORS

アンケートから

9月号の特集の眼目は十分有意義なものであったし、ある程度までそれに答えている。しかし、十分に目標を達しているかと言えば疑問である。...

座談会の出席者は、英語については優秀者あるいは超優秀者であるという意味では必ずしも多くの生徒の立場を代表しているとは言えない。...

ところでアンケートでは、塾・予備校から、その他一般からの中におもしろい内容のものが多かったように思う。...

いたりできる英語のチャンネル」などは英語を実際に使うことの少ない日本でもあったらよいと思う。...

小町谷 恩(東京都・高校教員)

公教育における語学教育は、教師・生徒ともに、「何のために」を根本から問い無理のない、易しいもの、楽しい物を求めるべきであるが、...

諸外国の「外国語教授実際例」をその指導法・教師訓練方法・授業スケッチ等の特集する記事を希望する。

連載記事に、①外国人による日本語修得法や勉強方法などの寄稿記事(英文) ②諸地方のいわゆる「すばらしい英語教室」、学校・塾にかかわらず、そのプロフィールを紹介する記事を扱ってほしいか。

江川昭男(兵庫県・自宅塾)

9月号座談会「まじめに教えてほしい」は面白い。参加者の中に、中学・高校の英語教師を加えたら更によかつたろうと思う。...

連載記事はいまひとつパツとしない

思う。たとえば、「だれにもわかる英文法」などは、現職の方々から生徒のつまづきやすい点などをアンケートしていただき、それらを重点的にしてもらいたい。

直井一博(東京都・大学生)

英語教育について、今どうあるべきか悩んでいた時なので、9月号特集はたいへんためになったと思う。

国際語としての英語、並びに文化と言葉という面での英語の特集もお願いしたい。

中村誠一郎(福井県・高校教員)

9月号特集は、英語教育に対するナマの声を聞いて大いに参考になった。問題点はいろいろあるが、教師が「被告」にならず、積極的に改善を計ることが必要であろう。

「英語教育」の改善への具体的方法・実践例などを扱ってみたい。アンケート方式もよいが、やや無責任な発言にはしないか。

「だれにもわかる英文法」は文字通りわかりやすく、教える場合の参考になる。「外国語入門」は中途半端。英語との関連を扱う方が役に立つ。

須賀川誠三(千葉県・大学教員)

単なる論議のみ取り上げるのではなく(不要というのではないが)、もっと、実際的な報告等、たとえば、各学校での様々な角度からの実践報告などを取り上げてみてはどうか。読者の意見交換の場を設けてみてはどうか。

色々な立場からの意見があり、大いに参考になった。とりわけ、外人の起用という声に賛成したい。少なくとも週に一度くらいは、来校してもらえる制度などがあればかなり役立つと思われる。

木谷孝志(大阪府・高校教員)

日本以外(特に東南アジアなど)の外国語教育の実態を特集してほしい。それに英語雑誌であるから、日本語だけの記事ではなく、外国人の研究論文を原文のまま、いくつか載せてほしい。...

な実践をやっている学校を発掘して特集してほしい。

9月号座談会は、何を目的としているのか疑問に思う。喋ることに意義があると考えているのか、喋ることで欲求不満を解消させようというのか。...

現在私の英語教育観の根底にある問題意識は、「何故もっと英語教育を、なのか」「何故会話力の充実を、なのか」「果してmassとしての日本人にとって本当に英語は必需品なのか」といったようなことである。

9月号の小笠原氏の弁によれば、これからは、「受信型教育では国としてやってゆけない」のであり、『諸外国に向って日本人が自分の立場、考え方、やり方を説明したり主張していかないといけない』のであり、それは、『国際語たる英語で行う』ものなのだそうである。...

五木田悟郎(北海道・中学校教員)

座談会「まじめに教えてほしい」(9月号)はたいへんよかつた。今までの教える側の意見に対して教えられる側の意見というのは、言っているところが部分的視野で未熟な面もあるが、痛いところをクリと突いていて大変参考になる。...

アンケートは、英語教師として参考になる意見が多かつた。中・高生では素朴な意見で当然と思われるものもあるが、英語教育全般を見通す力がないので自分勝手な言い分も多い。...

古寺義隆(京都府・中学校教員)

英語の授業は教える側が生徒のいろいろな意見を全部消化することは皆無に等しいと思う。...

要するに私は「英語必要論」に対して疑問を抱いているわけである。ドメスチックという批判を受けそうだが、必要性という観点から言えば、少なくとも学校教育においては、「英会話」よりも表現力養成を眼目にすえた語学教育の方が優先されるべきだと考えている。

大竹康仁(福島県・中学生)

H・T(埼玉県・大学生)



FROM THE EDITORS

本号は、6月号の読者欄で紹介した大喜多俊一氏の発言をきっかけとして特集を組んだ。テーマは、「なぜ」にどう対応するか、であるが、当然、「なぜ」を無視するという考え方も裏に含んでいる。

現在の教育は、ある意味では、相対的に過保護であると言える。情報過多ということもあって、教師も生徒もとかく主体性を失いがちで、なおかつ過保護に陥っているという、妙な現象がある。...

本号の特集に関連して、いま編集部では、読者諸氏の投稿による特集を組むことを考えている。近いうちに構想を発表したい。

9月号の特集「こうしてほしい英語教育」に対しては、ずいぶんたくさんのご意見をいただいた。その中には、生徒とか、いま英語教育に直接たずさわっていない人たちの意見というものは、とかく無責任になりがちだから、こういう意見を聞くことはあまり意味がないという趣旨の発言が少なからずあった。...

(W)

